

## ハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ

(Johann Wolfgang von Goethe, 1749年8月28日 - 1832年3月22日)は、ドイツの詩人、小説家、劇作家、思想家であり、ドイツ文学史において最も重要な人物の一人です。彼の作品は、古典主義からロマン主義への移行期に重要な影響を与え、ドイツのみならずヨーロッパ全体の文学、思想に大きな影響を及ぼしました。

ゲーテは18世紀後半から19世紀前半にかけての時代に活躍しました。この時期は、ヨーロッパ全体が啓蒙思想や市民革命、ナポレオン戦争など大きな社会的・政治的変革を経験した時代です。18世紀の啓蒙時代において理性や科学が強調され、個人の自由や社会正義が求められましたが、ゲーテの生涯においてはそれが古典主義やロマン主義へと変わり、感情、自然、個人の内面が重視されるようになりました。ドイツの文芸復興である「シュトゥルム・ウント・ドラング(疾風怒濤)」運動にも参加し、その代表的な作家としても知られます。また、彼の古典主義的思想は「ワイマール古典主義」と呼ばれ、シラーなどととも、芸術と人間性の調和を追求しました。

### 幼少期と教育

ゲーテは1749年、ドイツのフランクフルト・アム・マインの裕福な家庭に生まれました。幼少期から多彩な教育を受け、詩や劇に親しみました。法学を学ぶためにライプツィヒ大学に進学し、その後ストラズブル大学に移り、そこでアレクサンダー・フォン・フンボルトや他の知識人との交友を深めます。

### 「若きウェルテルの悩み」(1774年)

1774年に発表した小説《若きウェルテルの悩み》は彼の初期の代表作であり、疾風怒濤運動の象徴となりました。この作品は感情を抑えられず、恋愛と絶望の狭間で苦しむ若者の姿を描き、当時の若者に深い共感呼びました。この作品により、ゲーテは瞬く間に国際的な名声を得ます。

### ワイマールでの活動

1775年、ワイマール公国のカール・アウグスト公の招きでワイマールに移住し、終生ワイマールで活動続けました。ワイマールでは詩人や劇作家としてだけでなく、政治家としても活躍し、行政官としても重要な役割を果たしました。1786年にはイタリア旅行を

し、古代ローマやルネサンス文化に触れ、それが彼の芸術観に大きな影響を与えました。

## 「ファウスト」(1808年、1832年)

ゲーテの生涯の大作は悲劇《ファウスト》です。この作品はゲーテが一生をかけて書き上げたものであり、人間の欲望、知識の探求、善と悪の葛藤を描いています。ファウスト博士がメフィストフェレスとの契約により、人生の意味を追求し、魂の救済を求める物語です。第一部は1808年に完成、第二部はゲーテの死後に出版されました。

## 晩年と死

晩年のゲーテはヨーロッパ全体に広がるナポレオン戦争の時代を生き抜き、ナポレオン・ボナパルトとの対面も果たしました。1832年に83歳で亡くなるまで執筆を続け、死の直前には《ファウスト》第二部の執筆を終えています。彼の死後、その遺産はドイツ文化に大きな影響を与えました。

## 《若きウェルテルの悩み》

若者の恋愛や絶望、社会への不満を描いた自伝的要素を含む小説で、感情に訴えるスタイルが多く読者に影響を与えました。この作品は、ロマン主義文学の先駆けとされています。

## 《ファウスト》

人間の知識欲、自己実現の追求、善と悪の葛藤を描いたゲーテの代表作。哲学的・宗教的テーマが盛り込まれ、広範な影響を与えた作品です。

## 《ヘルマンとドロテーア》

フランス革命時代の難民問題を背景に、古代ギリシャ悲劇の形式を取り入れて書かれた物語詩。ゲーテの古典主義的なスタイルが顕著に現れています。

## 《イタリア紀行》

ゲーテのイタリア旅行の記録であり、彼が古代文化や芸術に対して抱いた情熱や、それが彼の芸術観に与えた影響を描いています。

ゲーテの思想は非常に広範であり、自然、哲学、文学、政治など多方面にわたります。彼は啓蒙時代の影響を受けつつも、単なる合理主義を超えて、感情や直感の重要性をも強調しました。彼の思想のいくつかの側面を以下に紹介します。

## 自然哲学

ゲーテは自然に深い関心を持ち、科学者としても活動しました。彼は植物の進化についての考察や、色彩理論に関する著作も残しています。彼は自然を全体として捉え、個別の科学的分析よりも直感的な理解を重視しました。

## 自己実現と人間の成長

ゲーテの多くの作品では、自己実現や人間の成長が重要なテーマとなっています。特に《ファウスト》においては、知識を追い求める人間の葛藤と成長が描かれており、ゲーテ自身の人生観が反映されています。

## 芸術と倫理の調和

ワイマール古典主義の中心人物として、ゲーテは芸術と倫理の調和を追求しました。彼は芸術が人間の道徳的・精神的成長に寄与するものであるべきと考え、感情と理性のバランスが取れた古典的な美を目指しました。

## 人間関係

### フリードリヒ・シラー

シラーはゲーテと同時代に活躍したドイツの劇作家であり、詩人でもあります。シラーとゲーテは親密な友人であり、二人の文通は有名です。彼らの思想は多くの点で異なりながらも、ワイマール古典主義の発展においては共通の目標を持ち、協力しました。

### ナポレオン・ボナパルト

ゲーテはナポレオンと直接会ったことがあり、ナポレオンもゲーテを非常に尊敬していました。ナポレオンは《若きウェルテルの悩み》を読んだことがあり、ゲーテとの対話を通じて文学や政治に関する考えを交換したとされています。

## カール・アウグスト公

ワイマール公国の公爵であり、ゲーテをワイマールに招いた人物です。彼の庇護の下、ゲーテは政治家としても活動することができました。

## ベートーヴェン

ゲーテはベートーヴェンとも交流がありましたが、二人の性格や芸術観の違いから、関係はやや緊張したものでした。ベートーヴェンはゲーテの作品に音楽を付けたことがありましたが、ゲーテはベートーヴェンの強烈な個性に困惑していたようです。

ゲーテはドイツ文学のみならず、哲学や自然科学、芸術など多様な分野で活躍し、その影響は広範囲に及びます。彼の作品と思想は、ヨーロッパのロマン主義や古典主義の発展に重要な役割を果たしました。